

**令和7年度 尚綱中学・高等学校
学校評価**

(評価対象年度：令和7年度)

学校教育目標		重点目標	
1	智と徳を兼ね備え、社会に貢献できる自立心豊かな近代女性の育成を目指す学校	1	教育の質向上
2	尚絅で学んで良かったと生徒・卒業生・保護者が真に思う学校	2	品性があり社会に貢献し得る生徒の育成
3	地域で存在感のある学校	3	生徒支援の確立
		4	地域貢献の推進
		5	個性豊かな生徒の獲得

自己評価総括のランクは、A B Cの3段階とし、次頁以降の「自己評価」で2/3以上A評価となった重点項目を「A」ランク、2/3以上AまたはB評価を「B」ランク、それ以外を「C」ランクとしている。

重点目標に対する自己評価総括

1	教育の質向上	B	教育の質の向上に向け、現状の課題を明確化した上で改善に着手した。全校生徒の英語力向上に関する数値目標には届かなかったものの、日本人教員とALTの連携による計画的指導により、生徒の習熟度は着実に高まっている。また、米国・中国からの訪問団受け入れを通じ、実践的な異文化理解とコミュニケーション能力の育成に大きな成果が見られた。今後は「総合的な探究の時間」の内容をさらに充実させ、生徒の課題解決能力および創造力を一層育んでいくことが喫緊の課題である。
2	品性があり社会に貢献し得る生徒の育成	A	中高それぞれの発達段階や個々の生徒の特性に応じた支援に注力した結果、生徒の自己理解と知見の深化が進んだ。特に論理的表現力の育成においては、ディベート甲子園への5年連続出場や英語ディベート全国大会出場といった顕著な実績を挙げ、社会で求められる論理的思考力・判断力・発信力の修得を証明した。本年度の卒業生171名は、これらの活動で培った力を糧に、それぞれが主体的に進路実現を果たした。
3	生徒支援の確立	B	国の就学支援金制度の改正に合わせ、将来を見据えた持続可能な特待制度への再編を実施した。特待制度（奨学生SS）を利用して難関国公立大学合格を果たした2名の実績は生徒の意欲向上を象徴する成果である。また、本年度より特別支援教育コーディネーターを配置し、スクールカウンセラーとの緊密な連携体制を構築したことで、よりきめ細やかな生徒支援が可能となった。生徒会活動においては、PDCAサイクルの導入により、自立的な組織運営を促した。
4	地域貢献の推進	A	熊本城マラソンボランティアやマチノガッコウ2025への参画をはじめ、環境保護活動（スポGOMI）、福祉活動（フードバンク・認知症サポーター養成で使用するプラバン作り）など、多岐にわたるボランティア活動を展開した。また、本校主催の英語暗唱大会や文化系部活動による地域公演などを通じ、年間を通して地域活性化に寄与した。これらの活動は、生徒が社会との接点を持ち、当事者意識を醸成する貴重な学びの場となっている。
5	個性豊かな生徒の獲得	A	在校生による魅力発信や学校ホームページを活用した機動的な情報発信が奏功した。中学校・進学塾・小学校への戦略的な訪問活動を強化した結果、令和8年度の高校入学者数は目標（220名）を大幅に上回る262名を達成した。中学校においても昨年度の12名から22名へと回復を見せた。今後はこの高い期待に応えるべく、一人ひとりの個性を伸ばす教育環境の維持・向上に努める。

	評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
教育の質 向上	国際共通語である英語力の向上	全校生徒の英語力の向上	B	中学3年卒業時の準2級取得率は36%（3級取得率79%）、高校3年卒業時の2級（GTEC930点以上）取得率は42%であった。中学の目標は達成できなかったが、不合格生徒も合格点に近い点数であった。
		英語教員の指導力の向上	B	達成率は総合26%、特進33%。生徒によって英語力向上への意識の差が見受けられるが、英語教員及びALTIによる計画的な指導もあり、生徒の英語力は向上してきている。
		中長期留学制度の確立	A	県私学教育研修会をはじめ、業者の英語指導研究会や予備校の授業研修会等に参加した。また難関私立大学の入試問題を解くことで授業内容の充実を図った。
	国際交流プログラムの充実	姉妹校や交流校との交流促進	A	6月に米国・デンバー、11月に中国・蘇州からの訪問団を受け入れ、授業や部活動の体験とESS部との交流を実施した。9月には姉妹校（韓国・鶴城女子中学校）とオンライン交流を実施した。
		交換留学制度の確立	B	7月に熊本県のグローバルジュニアドリーム事業に高校生1名が参加し台湾を訪問し、8月にニュージーランド語学研修に中学生4名、高校生9名が参加した。11月から4ヵ月間、オーストラリアに中学生1名が語学留学した。
	課題解決能力や創造力を育む探究教育の推進	「総合的な探究の時間」の年間スケジュールの作成	B	総合コース1年生の礼法教育の実施期間を1学期までとし、学年で取り組む探究学習時間の確保を行った。次年度から尚綱大学・尚綱大学短期大学と連携した「総合的な探究の時間」の確立に取り組む。
		インターンシップなどの校外活動の充実	A	インターナショナルエアアカデミー福岡校におけるインターンシップの実施と高大連携による研究室訪問や講義等を実施した。
		企業と連携したプロジェクト型探究活動の推進	A	令和8年2月、一貫高2の生徒たちがNPO法人「せいば」と連携してマラウイの小学校の給食支援のためのコーヒーの販売を下通りで実施し、売上235,456円を達成した。
	教育力の向上	探究学習の成果発表会の実施	B	各コース毎に探究学習の成果発表会を実施する。
		専門教科並びに進路指導力の充実	B	外部研修制度の積極的活用と研修会への参加を促す。
品性があり社会に貢献し得る生徒の育成	中学校における将来像を掘り起こす指導	情報共有方法の検討及び教職員の連携強化	B	実施した生徒情報共有会の検証と、更なる効果的実施方法を検討する。
		表現力育成のための教科横断的な活動の実施	A	プレゼンテーション、ディスカッション、ビブリオバトル、ディベート、弁論など、教科を横断した表現力の育成に繋がる活動を実施する。
	総合進学コースにおける尚綱大学・短期大学部への進学率40%	「コトバノチカラ」プログラムの充実	A	グローバル教育と環境教育を結び付けた取り組みを充実する。
		進路や将来について考える機会の確保	B	学年毎のテーマに基づき、講演会、集会などの実施と、生徒一人一人が進路や将来について考える機会を設ける。
	総合進学コースの特色	尚綱大学・短期大学部進学希望者への進路指導強化	A	尚綱大学・短期大学部の学部別説明会・個別相談会等を実施することで生徒の理解を促し、進学への明確な意志と基礎学力を充実させる。
		外部進学を希望する生徒への進路指導強化	A	外部進学を希望する生徒対象に特別ゼミ、朝課外、放課後課外等を充実させ、学校推薦型選抜・総合型選抜に対応できる能力の養成をする。
		生徒・保護者への情報提供や進路指導の実施	A	高校1・2年次における大学授業体験や生徒と保護者対象の大学・短期大学部説明会の開催とオープンキャンパスの参加勧誘を行う。
		進路希望別クラスのカリキュラムや授業内容の検討	A	進路希望別クラスの特徴あるカリキュラムや授業内容の検討を行い、年間計画を作成する。
	特別進学コース・一貫コースにおける国公立大学及び難関私立大学の合格実績向上	将来像の具現化のための進路指導カリキュラムの検討	B	総合的な探究の時間の各コース・学年の担当者の配置、並びに担当者間での情報共有と系統立てた計画表を作成する。
		検定試験や資格習得への指導の実施	A	各教科で担当者を配置し、生徒への受験の促し及び指導を実施する。
進路選択別の発表の機会を設定		A	探究活動等で学んだ内容をアウトプットする機会として、進路選択別・コース別の発表会を計画し、系統立てた取り組みを実施する。	
進路指導の充実	受験に対応したコース毎のカリキュラムの見直し	A	2学期以降の共通テスト対策授業及び私立大学・国公立大学2次対策授業を展開する。	
	中学3年間の進路意識の向上	A	中学3年次より国公立大学、難関私立大学の情報を積極的に提供し、志望校として意識させるための指導とコース集会を実施する。	
	受験科目を早期に絞らせない指導の実施	A	受験科目を早期に3科目に絞らせず本人のやる気を引き出すため、授業担当者全員で共通認識を持ち、クラス担任と連携協働した指導を実施する。	
進路指導の充実	国公立大学、難関私大の受験を意識した講座の設定	A	朝夕課外や夏期・冬期課外の充実を図ると共に、早期に国公立大学、難関私立大学の受験を意識させるような講話の実施と情報の提供を行う。	
	進路指導部のサポート体制の見直し	B	進路関係書籍の充実を図る共に、進路検索用パソコンの購入等で環境面の整備を行う。	
	コース毎の模試分析、教科担当者会の実施	A	購入した資料等は国公立大学2次試験対策また私立大学一般試験対策として有効に活用した。	
進路指導の充実	中学校対象の進路説明会の充実	A	進路検討会は2年生は3学期期末考査時に、3年生は6月期末考査時、11月期末考査時、1月共通テスト後に実施した。職員間で情報共有することで適切な進路指導に役立てた。	
		A	「進路の手引き」を配付し、見直しをもって学校生活を過ごすよう、進路担当者から説明を行った。2月には、中1～高3の生徒全員を対象に卒業生による進路講話を実施した。	

	評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
生徒支援の充実	特待特待制度や学力特待SSの成績基準等の内容の検討	就学支援金を考慮した本校の将来を見据えた特待特待及び学力特待制度を検討する。	A	国の就学支援金制度の変更に伴い、特待特待制度を学園と協議の上変更し、8年度新入学生招集日において説明した。
	文化系特待生への支援	生徒が在籍している習い事教室等に対する広報活動で特待生制度を周知する。	B	在校生が所属する校外のクラブや各種教室等の所在地と指導者に関する情報を基に、訪問や資料送付による広報活動を行った。
	生徒支援体制の確立	生徒情報の在り方の検討	B	生徒情報共有会議（2回）、特別支援校内委員会（2回）を実施した。個人データは共有フォルダで管理し、情報は随時更新することとしている。
	支援が必要な生徒への指導力強化	カウンセラーとの協力体制の継続と専門的な知識を持つ職員を育成を推進する。	A	カウンセラーの資格を有する養護助教諭とスクールカウンセラーとの連携及びSSWを利用することでより専門的な助言や支援を受けることができた。
	育友会・後援会・同窓会との連携の確立	HP、Classiなどでの情報配信	A	学校行事での生徒の状況や体育・文科系の大会及び活動報告などを学校HPやClassiを利用し、スピーディーに配信した。
	在校生による現状報告会等の実施	生徒代表を中心として、育友会や同窓会と連携した現状報告会及び本校の今後の在り方等のディスカッションを計画する。	B	在校生と育友会及び同窓会が連携した現状報告会は実施できなかったが、文化祭1日目に実施する各クラス、各委員会及び部活動等が行う発表に、保護者、同窓会（花桜会）も案内した。
生徒会活動や部活動の充実	同好会、愛好会の規定等の見直し	生徒会議による同好会、愛好会の規定等の見直しを行う。	B	ボランティア同好会と活動が重複するボランティア委員会を廃止した。また、教職員の人数と安全面の確保から、部員が少ない同好会・愛好会については廃止を検討している。
	自立した組織づくりへの指導	生徒会活動の在り方を検討するとともに、委員会活動の活性化の促しを行う。	B	7月に文化祭とクラスマッチを実施。要項の作成時には、生徒会が生徒たちから意見を聞き、その内容を取りまとめてルール等を設定した。
	年間計画の作成	部、クラブ、委員会で参加しているボランティア活動の年間スケジュールを作成する。	B	年間スケジュール作成までは至らなかったが、依頼されたボランティア活動は全生徒に呼びかけて対応した。次年度は本年度のボランティア活動実績を基に、学校行事を考慮した年間計画の作成を行う。
地域貢献の推進	ボランティア活動、SDGs等の活動支援	ボランティア活動の内容の精査	A	本年度も多くのボランティア活動の要請があり、動員がある場合は担当者で内容を精査し、メンバーを募って参加できるように配慮した。
	ボランティア活動参加者の状況配信	参加したボランティア内容や取り組み状況等を学校HPやClassiで配信する。	A	マチノガッコウ2025、熊本城マラソン等、生徒が参加したボランティア活動の状況については、学校HPやClassiで適宜配信した。
	SDGsに対する取り組み	地域の自治会等と連携した環境美化を計画し実施する	B	地域の自治会等と連携した環境美化はできなかったが、スポGOMI甲子園2025・熊本大会には、昨年に続き参加した。
地域行事への積極的参加	塾、地域の自治会、小中学校との連携	塾、地域の自治会、小中学校と連携を取りながら、部活動顧問や広報部を中心に広報活動を実施する。	A	塾と共催の英語活動を実施したり、各種イベントに和装礼法部、ギターマンドリン部、合唱部、バントワリング部等が出演した。9月に第23回尚絅英語暗唱大会を実施した（小学生30名、中学生17名が参加）。
	探究活動の社会的な活動への発展	探究活動への生徒の積極的な参加を推奨し、企業やNPO団体、地域とのコラボ等の実現に向けて相手企業・地域との連携を検討する。	A	一貫高2の探究活動は、マラウイの小学校の給食支援のためのコーヒー販売をNPO法人「せいぼ」と連携して行い、街頭販売を下通繁栄会の協力を得て2月21日に実施した。（売上235,455円）
個性豊かな生徒の獲得	計画的な訪問活動	年間計画に則った全職員での訪問活動の継続と管理職で実施する訪問活動を継続する。	A	在校生の学校生活に支障が出ないように配慮し、計画通りに1学期に公立中学校の訪問活動を行った。2学期は管理職にて、熊本市内の訪問活動を実施した。令和8年度の入学者数は、中学生22名、高校生262名。
	インターネット媒体の活用	動画配信、YouTube等のインターネット媒体の積極的な活用と中学・高校入試におけるWeb出願を継続する。	A	在校生に協力を呼びかけて新たな動画配信を行った。また、高校入試のWeb出願は2年前より導入し、仕事の効率化に結びつけている。中学は受験人数が少ないこともあり、現在は導入していない。
	本校の魅力の継続的な発信	在校生や進学塾から得た情報を参考に、一貫した本校の魅力を継続的に発信する。	A	スクールガイドを中心に学校HP、その他の広報媒体を通して本校の魅力を継続的に発信した。また年末には進学塾を個別に訪問し、本校の魅力を伝えるとともに情報交換を行った。
	外部会場や校内の説明会の内容の検討	校外で行う説明会の内容を工夫し、効果的な情報発信を継続する。	A	オープンスクールでは、生徒からの説明を入れたことで参加者から好評を得た。参加者アンケートの結果では、口コミ、学校HPが主要な情報源となっているので、次年度はこの点を考慮した活動を実施する。
	受験生・入学生の質の低下への対応	合格のボーダーラインを年々上げて一定のラインを維持するとともに、その分析結果を入試検討会議に反映する。	A	入試データを整理し、合格のボーダーを過年度に遡ってまとめ、今後の参考資料に活用できるようにした。令和8年度の高校入学者数は就学支援金制度の変更の影響もあり、262名となった。
	広報戦略案の策定	クラブチーム、習い事教室等の実態調査と各種大会の開催日を把握し、戦略を策定する。	B	大会視察の際には、学校案内資料を持参するなどして適切に対応した。また、中学生と本校部活動生との合同練習などを実施することで繋がりを強化した。
転退学者の削減	ホームページ、YouTube等のWeb関係の充実	在校生の校外での諸活動や部活動等での実績をホームページ、YouTube等のWeb上で積極的に情報提供する。	A	学校のホームページや広報誌、外部のメディアを通して本校の生徒や部活動の魅力、実績についてタイムリーに情報発信した。
	習い事やクラブチームでの活動種目の生徒募集の強化	書道、バトン、水泳、バレエなど、入学後も学業と両立しながら活動を継続できる種目の情報収集を行い生徒募集活動へ反映する。	B	書道、バントワリング、バレエ等の種目において、部顧問が各教室・クラブ等に出向き、情報収集と募集活動を行った。
	特待特待生勧誘活動の検討	公立小中学校やクラブチームの指導者との繋がりの強化と広報活動の充実を図る。	B	中学校の外部指導者導入や、スポーツ活動をクラブチームで行う生徒も多くなっており、各大会視察を通じて情報を収集した。また、特待特待生で特別進学コースへの入学を希望する生徒もおり、検討を開始した。
	外部関連機関との情報共有と研修の推進	外部関連機関との情報共有と教職員、保護者への支援の在り方等に関する研修案内等を適宜配信する。	A	特別支援教育に関する教職員の研修を9月に実施した。悩みを抱える生徒の対応についてはスクールカウンセラーが真摯に対応しており、保護者に外部関係機関の情報を提供することはなかった。
専願生の受験者数の増加	教職員間の情報共有体制の見直し	各学年への特別支援教育に関する担当者配置による情報共有体制の見直しを行う。	B	本年度から特別支援教育コーディネーターを配置したことにより、情報共有体制がスムーズになった。次年度は各学年に1人ずつ特別支援教育に長けた先生を配置する。
	時代に合った校則の見直し	生徒を中心に、時代に合わせて、随時、校則の検討を行うとともに、制服・指定用品購入についての見直しを行う。	B	校則は伝統を重んじつつ、生徒会が時代に合うよう検討を始めた。制服・指定用品は、生徒指導部を中心に、指定用品の見直しを実施した。本年度から導入したポロシャツとスラックスは、生徒から好評を得た。
	広告のイメージの一貫性を維持	広告のイメージの一貫性を維持し、学校HPやSNS、その他の広告媒体に反映する。	A	年間を通して学園広報部と協働し、スクールガイドを中心に学校HP、その他の広報媒体（テレビ）において、本校の一貫したイメージを反映して情報発信した。
	塾や学校などに重点を置いた活動を検討	人口が増えるエリアや、本校近隣にある塾や学校などに重点を置いた広報活動を継続する。	A	菊陽町、合志市、大津町、御船町、益城町など人口増加エリアにある学校及び塾については管理職が出向き、広報活動と情報把握に努めた。
中高のキャッチフレーズの検討	在校生への広報活動・情報発信	在校生の校外での諸活動・部活動等での実績に関する情報を校内掲示板やデジタル媒体を通して適宜発信する。	A	生徒が出場した各種大会の結果や成績、行事の様子等については各顧問からのClassiによる報告で迅速に配信した。また、デジタル化を鑑み、紙媒体での発行数を減少させた。
	中高のキャッチフレーズの検討	学園広報部と連携して中高のキャッチフレーズを検討し、広報媒体で適宜配信する。	B	本年度は中高広報部では検討せず、学園広報部に協力した。

学校生活に関して「生徒」「保護者」にアンケートを実施しました。

○：よくあてはまる・ややあてはまる ●：あまりあてはまらない・全くあてはまらない

生徒による評価		○	●	生徒による評価の総括
1	尚絅に入学して良かった	82%	11%	<p>本年度も「建学の精神」に基づき、生徒一人ひとりが自己の可能性を追求できるよう、学習、部活動、学校行事の各方面において教育活動の充実に努めてきた。項目8の施設・設備の満足度が97%に達し、項目4の学校行事や項目7の進路指導への評価も向上している点は、本校の教育環境整備と指導体制が一定の成果を収めている証左であると思料する。</p> <p>一方で、本年度の結果を詳細に分析すると、複数の項目で満足度の低下が見られる。特に、項目1の「尚絅に入学して良かった」が8ポイント減の82%、項目3の「学力向上への積極的取り組み」が5ポイント減の83%となったことは重く受け止めなければならない。また、項目5の「礼儀作法」についても5ポイントの低下が見られ、生活態度や学習意欲といった生徒の内面的な意識において、昨年度ほどの高まりが見られなかったことが推察される。</p> <p>今後の課題は、高い水準を維持している施設面や行事の充実度を、いかに生徒個々の自己肯定感や学習への主体性に結びつけていくかである。特に満足度が低下した項目については、生徒が日々の成長をより実感できるような内発的な動機付けの工夫が必要である。項目10の相談環境の満足度も微減していることから、一人ひとりの心の機微に寄り添ったきめ細やかな支援体制を再構築し、次年度の教育活動に反映させていきたい。</p>
2	友人と仲良く楽しい学校生活を送っている	94%	3%	
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	83%	12%	
4	学校行事が充実している	88%	10%	
5	礼儀作法に積極的に取り組んでいる	91%	4%	
6	部活動が盛んである	94%	2%	
7	進路指導が適切に行われている	86%	5%	
8	施設・設備が充実している	97%	2%	
9	環境美化に取り組んでいる	92%	1%	
10	悩み等が生じた際に相談のできる環境を整備している	80%	8%	

保護者による評価		○	●	保護者による評価の総括
1	尚絅に入学させて良かったと思う	90%	7%	<p>本年度の保護者アンケート結果を分析すると、全ての項目において満足度が昨年度を下回ったという極めて厳しい結果となった。特に低下が顕著なのは、項目5の「礼法教育」が6ポイント減、項目1の「入学させて良かった」及び項目3の「学力向上」がそれぞれ5ポイント減となった点である。本校の教育の柱である学習指導や生活指導において、保護者の期待と現状に乖離が生じている可能性を重く受け止めなければならない。</p> <p>一方で、項目9の環境美化や項目8の施設・設備については90%台の高い評価を維持しており、教育環境の基盤に対する信頼は依然として厚いことが伺える。</p> <p>課題は、満足度が7割を下回った項目10の「相談環境」と、昨年度から微減が続く項目7の「進路指導」である。これらは生徒のアンケート結果とも連動しており、学校側の具体的な取り組みや支援体制が、安心感や成果として保護者まで十分に届ききっていないことが推察される。</p> <p>次年度は、低下が見られた各項目の指導内容を再点検するとともに、特に相談体制の周知や進路情報の発信を一層強化したい。保護者とのコミュニケーションの質を高め、「よく分からない」という不安を解消していくことで、満足度の回復と本校教育への信頼再構築に全力を尽くしていく。</p>
2	友人と仲良く楽しい学校生活をすごしていると思う	91%	8%	
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	78%	18%	
4	学校行事が充実している	82%	14%	
5	礼法教育に積極的に取り組んでいる	84%	7%	
6	部活動が盛んである	87%	6%	
7	進路指導が適切に行われている	76%	15%	
8	施設・設備が充実している	92%	3%	
9	環境美化に取り組んでいる	94%	3%	
10	悩み等が生じた際に教育相談のできる環境を準備している	68%	20%	

学校評価委員（保護者の代表・同窓生の代表）に評価をお願いしました。

委員からは総評として、「全体的に教育活動は活性化しており、生徒の変容にも手応えを感じるが、アンケート結果等の課題に対しては組織的な分析が必要である。」といったご意見をいただきました。以下は、主なご意見。

- 重点目標である「品性があり社会に貢献し得る生徒の育成」および「個性豊かな生徒の獲得」において、自己評価が「B」から「A」へ向上したことは、教職員の組織的かつ継続的な指導が結実したものと高く評価する。
- 高校入学者数の増加については、就学支援金制度の変更に加え、生徒主体の行事運営や制服へのポロシャツ・スラックスの導入など、生徒の多様性と主体性を尊重する教育姿勢が学外から広く支持された結果であると捉えられる。
- 国公立大学や難関大学への合格実績を着実に積み上げている点は、進学指導の充実を示しており、本校の教育水準の向上とブランド力の強化を実感させるものである。
- 総合学園としての強みを活かした独自の教育環境は、公立校にはない大きな魅力となっている。特に中学校におけるきめ細やかな指導体制は、生徒の「思考力」を育む基盤となっており、保護者からの高い信頼に繋がっている。
- スマートフォンの普及に伴う人間関係の複雑化に対し、学校側の情報モラル教育を評価しつつも、トラブルの未然防止には家庭の責任と役割が極めて重要である。今後、より一層の「学校と家庭の連携」を強化し、見守り体制を構築することを期待する。
- 生徒の挨拶や表情の明るさに顕著な改善が見られ、校風の活性化が感じられる。社会情勢の変化に柔軟に対応した教育を継続し、生徒一人ひとりの自己実現（夢の達成）を力強く支援する学校であり続けることを切望する。
- 保護者アンケートの結果が全項目で前年度を下回った点については、実感との乖離はあるものの、真摯に受け止めるべきである。今後、数値が低下した要因を精査し、迅速に改善策を講じることで、保護者の不安解消と信頼回復に努めていただきたい。

■ 総合評価

令和7年度の学校教育活動は、生徒一人ひとりが自己を研鑽し、多様な価値観に触れる機会を創出することに注力し、生徒たちは「建学の精神」と「教育の理念」の下、志を高く掲げ、ひたむきな努力と挑戦を続けることで、様々な分野で結果を残すことができた。令和8年度の入学者数については、昨年度の反省に基づき全教職員と管理職による学校訪問の役割分担を明確にして実施した結果、高等学校の入学者数は目標220名を大幅に上回る262名となり、本校の教育活動への期待が地域に広く浸透していることが実証された。中学校も目標には及ばなかったものの、昨年度の12名から22名まで回復しており、広報体制の改善が一定の成果を収めた。この背景には、生徒主体の行事運営や制服のポロシャツ・スラックスの導入、過去最高の来場者を記録した大学と連携した学園文化祭の開催など、生徒の主体性を尊重する姿勢が外部へ好印象を与えたこと、そして、国の就学支援金制度の変更の影響が大きいと見られる。

教育活動においては、体育系・文科系の部活動の生徒が全国高等学校総合体育大会・全国高等学校総合文化祭に出場した。また、ディベート甲子園5年連続出場や英語ディベート全国大会出場、米国・中国・韓国との活発な国際交流、地域ボランティア等、本校独自の強みを活かした実績を残した。しかし、進学実績や全校的な英語力の向上、及び生徒・保護者アンケートにおける「進路指導」や「学習意欲」への評価については目標値に届かず、課題が鮮明となった。特に、特別支援教育コーディネーターの指名や生徒情報共有会議の開催など、組織的な支援体制の整備は進んだものの、それが個々の生徒の具体的な学力伸長や満足感に結びつくまでには至っていない。

令和8年度は、確保できた多くの生徒に対し、教育の質をいかに保証するかが問われる。本年度整備した相談体制を基盤としつつ、尚綱大学・尚綱大学短期大学部との連携をさらに深化させ、こども園、中学、高校、大学・短期大学部を有する総合学園だからできる「総合的な探究の時間」の構築と、生徒個々の進路実現に向けた教師の「確かな指導力」の向上を全学を挙げて追求したい。

■ 令和7年度の課題を踏まえた令和8年度の改善方法

① 教育の質向上

教員の専門性を活かした教科指導の深化とともに、導入済みのDXツールを最大限に活用し、個別最適な学びを推進する。また、各コースの特色を再定義して新たな魅力を創出するとともに、テストデータの詳細な分析を通じて、生徒一人ひとりの学力伸長を実感できる指導体制を構築する。

② 品性があり社会に貢献し得る生徒の育成

教科横断的な探究学習をさらに充実させ、生徒自らが「在り方・生き方」と関連付けながら課題を発見し、解決策を導き出すプロセスを重視する。ディベートやプレゼンテーションの機会を継続的に提供することで、高い自己認識と論理的思考力を養い、社会の持続的な発展に寄与できる主体的な女性を育成する。

③ 生徒支援の充実

特別支援教育コーディネーターとスクールカウンセラーを中心とした組織的な支援体制を定着させる。全教職員での情報共有を徹底し、心理的安定を図るメンタルケアと、早期からのキャリア観形成を両立させることで、生徒が将来への希望を持って学校生活を送れるよう支援を強化する。

④ 地域貢献の推進

地域社会のニーズに柔軟に対応したボランティア活動を継続・拡大する。環境保護活動や自治体イベントへの積極的な参画を通じ、教室での学びを社会実装する機会を増やすことで、地域社会から信頼され、他者と協働して社会貢献に喜びを見出す生徒を育成する。

⑤ 個性豊かな生徒の獲得

尚綱大学・尚綱大学短期大学部との高大連携プログラムを具体化し、学園一貫教育の魅力を明確化する。内部進学の特長を積極的に発信するとともに、高校入学者数の好調を中学校の募集増へと繋げる広報戦略を展開し、令和9年度入学者数、中学校30名、高等学校220名の達成を目指す。